

Civivi-vivi



高松市美術館
ボランティア通信
2001年4月



し び の 一 と

印象派展

誌上ギャラリートーク

今年度の特別展のトップを飾るのは「ニューヨーク・ブルックリン美術館所蔵 印象派展 フランス・アメリカ」(4月20日~5月20日)です。ここでは、その出品作の中から Civivi-vivi が選んだ2作品をご紹介します。

クロード・モネ 〈国会議事堂・陽光の効果〉 1903年

モネ(1840-1926)

は1870年、普仏戦争の徴兵から逃れるためロンドンに渡りましたが、その30年後再びその地に渡り、移り変わる光の効果や建物や橋にかかる霧をとらえた100点近くの作品を制作しました。この作品もそのとき制作されたもので、霧の中にかすむ国会議事堂、画面右上からさしこむ陽光、そしてそれを受けて光り輝くテムズ河の三者が、見事な美しい対比を見せながら描かれています。

モネをはじめとする印象派の画家達は、物には固有の色というものには存在せず、物の色は太陽の光の加減によつて絶えず変化していくということを発見しました。そして彼らは、刻一刻と移りゆく自然の姿をあるがままに描き出すため、それまでの常識を破り戸外での制作を実践し、またある視覚的技法を開発したのでした。その技法を体験するためには、展示室で作品の前に立つた際、絵と自分との距離を様々に変えてみてくだ



さい。近くで見るときは様々な色彩が荒いタッチでランダムに塗られているようにしか見えなかつた部分があり、離れてみると、目の中で混ざり合つて具体的な像を結びようになりません。これは「色彩分割」あるいは「筆触混合」とよばれる技法で、色の混合をカンヴァス上ではなく、人の目の網膜上で行うため、対象を明るさを失うことなく描き出すことが可能とな

ります。この作品では、水面の部分にそうした技法による効果が顕著に現れています。印象派の画家たちが成し得た見事な「光の表現」。その秘密は彼らが独自に編み出した魔法のような技法にあるのです。

メアリ・カサット 〈赤い服の女性と子供〉 1901年頃

カサット(1844-1926)

は、パリで開催された印象派のグループ展に参加した唯一のアメリカ人画家で、いわばフランスからアメリカへの印象派の橋渡しをした存在です。彼女は特にドガとの交流が深く、グループ展に参加していた頃の作品は、大胆な構図と明快な色彩の点でドガとの近親性を感じさせます。しかしながら、彼女は女性であるが故にドガ達が描いた様な場所に立ち入れない事もあり、その作品にはいわゆる「モダンな」パリの都市風景はあまり登場しません。そのかわり、他の印象派画家の作品にはあまり見られない家庭的な雰囲気



た光景が数多く描かれました。本作では、赤ん坊を抱える母親の姿が描かれています。見る者の注目を集めるのは、後ろを向いた母親ではなく、機敏そうな目としっかりとした姿勢で描かれた赤ん坊の方です。凜とした赤ん坊に対して、母親の存在は鏡におぼろげに映ったその表情から感じられるようにどこか寂しげです。微笑ましい母子像としてとらえることも可能ですが、母親の子育てに対する疲労や倦怠、さらには育児を第一とする当時の女性が置かれていた不自由な境遇が表現されているようにも思えます。皆さんはどのよう

に感じられますか?
石床亜希・牧野裕二

アーティスト 小沢剛に話を聞く

以前鑑賞に伺い、その真面目なふざけぶりにcivi一同大きな衝撃を受けた坂出の讃岐醤油画資料館(注1)。そこに作者の小沢剛さんが来るというので、作品の成り立ちや作者自身に興味津々だったciviメンバーは突撃インタビューを敢行しました。

「日本の美術史を読み解く作業を、画材をうまく使ってできないかと思ってただけど、醤油を使ったら解決できたんですね。隠し味かなんか知らないけど(笑)。醤油の味覚は自身のアイデンティティとして身に染みついたものですかね」。

「一般的に画家と呼ばれる人たちは油絵や岩絵具とかを何の疑問もなしに使ってるけど、それらは生活の中で何のリアリティーもないものじゃないですか。で、何の必然性もないのにどうして、この人は油絵具を使うのかなって疑問なわけですよ。画材屋で売ってるから?過去の巨匠が使ってるから?アーティストだったらそういったところに問題意識もって、画材のところから取り組むべきじゃないかと僕は思ってるんですよ。そういうことがあって醤油に行き着いたんです」。

画材の時点からまずスタートする、といった小沢さんの作品制作への取り組みからは、その一見軽い(!)作風とは裏

腹に、芸術に対する愚直なまでの誠実な態度が窺い知れました。また権威的なものへの批判が話の随所に感じられました。そうした反骨精神をノスタルジックな叙情性と合体させているところに、小沢作品の魅力の秘密があるような気がしました。今後の活動について聞いたところ、「作品のアイデアは企業秘密で言えないけど、10個くらいはある」とのこと。これからの展開が大いに期待されます。

[牧野裕二]



小沢剛氏

(注1):「醤油画」という絵画ジャンルが実は日本に存在していたという架空の事実に基づき、醤油で模写された古代から現代までの日本の「名画」が展示されている施設。civiメンバーの何人かは訪れた際、パロディであるということを知った後、キツネにつままれたように半信半疑であったという。

(注2):讃岐醤油画資料館を含む小沢さんの芸術活動のこれまでの歩みをつづった「小沢剛世界(ワールド)の歩き方」が1月に出版されました。お問合せはオン・サンデーズ(03-3470-1424)まで。

ギャラリートーク活動



私たちにとって初めての写真展でのギャラリートーク(以下GT)となった「ロバート・キャバ賞展」。

最初は展示されるのが全て今世紀の出来事に取材した報道写真ということで、重苦しい雰囲気GTになりそうで不安でした。しかし、展示室に並べられた写真を実際に見てみると、どれもみな人間の瞬間のドラマを見事にとら

えた、芸術的にも質の高いものばかり。すっかり感銘を受けた私は、意外とスムーズにGTをすることができました。

その次の「イギリス・フランス近代名画展」は、18世紀から20世紀にかけての英仏における様々な美術の流れを一望できる、見ごたえのある展覧会でした。ここでの一番の収穫は、一方通行でなく、お客様と対話形式でGTができたことです。会話をするなかで私が知らなかったこと、気づかなかったことを随分と発見させられ、大変貴重な体験をすることができました。

今後もぜひ、お客様と楽しく充実した時間を共有できるようなGTを続けていきたいと思えます。

[石床亜希]

鑑賞旅行、岡山へ



山本正(いろいろな色と色)(後方)とサインペン及びゼリービーズ(前方)

晴天の朝、海を渡り、岡山県立美術館で「見ることの再発見—もっと美術を楽しむために—」のギャラリートークに参加しました。会場に足を踏み入ると、100本の色鉛筆と数個のマニキュアが並べられていたりなど…と、どうも見慣れた展覧会とは趣の違う様子。会場内をしばらく進み、絵の前にカラフルな200本のサインペンと大量のゼリービーズが置かれた展示の前に来たところで柳沢学芸員がトークを開始。話の展開にワクワクしていたら「さあ、この色はペンとゼリーのどちらに似てる?」と逆に質問を向けられドキドキ。別の部屋ではこれまた奇妙な位置に絵が掛けてあったり、絵の前に畳が敷いてあったり…。ただ絵

鑑賞旅行、高知へ

秋には高知県立美術館の「ラファエル前派展」へ。お礼も我が高松市美術館では「イギリス・フランス近代名画展」の会期中で、ラファエル前派については学んだばかり。しかも高松市美では数点しかなかったラファエル前派の作品が100点近くもずらりと並び、奥野克仁学芸員の解説のおかげで、にわか仕込みの知識の骨組みに少し肉付けができたような気がしました。すでに「イギリス・フランス近代名画展」のトークを終えた者は「あー、こちらを先に見ていけば!」と悔しがり、まだの者は「トークの前に見られて良かった!」と喜ぶ、私たちにとって明暗分かれた展覧会でした。

頹廢的で妖しい魅力に満

を見るだけでなく、「みる」という行為自体を考えるという、私たちには「眼からうろこ」の展覧会でした。展示を見たあと、ボランティアに関する講義も受け、作品の解説を目的とするのではなく、お客さんが「自分の目で作品を見、考え、楽しむ」ことができるためのお手伝いをするのが大事である、と教えていただきました。

[池田幸子]

主な活動

2000年

- 8・19 「見ることの再発見—もっと美術を楽しむために—展」(岡山県立美術館)の鑑賞・岡山県立美術館の美術館ボランティアについて/ギャラリートークおよびレクチャー:柳沢秀行(岡山県立美術館学芸員)
- 8・25 讃岐醤油画資料館にて作者・小沢剛に話を聞く
- 9・22~10・22 「20世紀と人間 ロバート・キャバ賞展」ギャラリートーク
- 10・1 しびのーと(高松市美術館ボランティア通信)創刊号発行
- 11・2~12・3 「英国パティエン美術館所蔵 イギリス・フランス近代名画展」ギャラリートーク
- 11・8 「19世紀英国ヴィクトリア朝美術の精華 ラファエル前派展」(高知県立美術館)の鑑賞/ギャラリートーク:奥野克仁(高知県立美術館学芸員)、「牧野富太郎植物画展」(高知県立牧野植物園)の鑑賞
- 12・9、12 「東京芸大美術館名品展」(香川県文化会館)の鑑賞/ギャラリートーク:ボランティアwithのみなさん

2001年

- 1・12~2・12 「マティスとモデルたち展」ギャラリートーク
- 3・9~3・25 「高松市美術館コレクション展」ギャラリートーク [山上紹代]

ちた世紀末美術に触れたあとは、ガラリー気分を変えて一昨年新しく生まれ変わった牧野植物園へ。牧野博士が分類するまで日本に植物学というものではなく、ケヤキやワサビやユキワリソウなど私たちがよく知っている多くの植物に牧野博士が命名するまでは名前がなかったのだと知り、何事にも最初があるのだと改めて気づかされました。

最後に牧野博士の言葉をひとつ。「沈む木の葉も流れの具合、浮かぶその瀬も無いじゃない」。功績を認められながらも経済的には大変苦勞した博士が75歳で朝日文化賞を受賞したときに詠んだ一句です。

[池田幸子]

アートゲームを始めよう!

平田健生さんのレクチャーから

1962年徳島市に生まれた平田さんは大阪大学文学部美術学科を卒業され、1985年滋賀県立近代美術館の学芸員となつて以来、美術館教育に熱心にとり組んでこられました。美術入門編的な展示会の企画や各種ワークショップの実施、児童美術等、様々な活動を通して芸術の可能性を模索しておられます。1999年2月6日に開催されたボランティア養成講座では、講師である平田さんに「誰でもできる・どこでもできる」指導方式がなくてもできる「滋賀方式」によるアートゲームを軸に、楽しい講義を展開していただき、美術との関わりかた、ボランティア活動の意義についてやさしく教えていただきました。

「陶芸家は土をこねているだけで幸せな気分になるそうです。土という素材に触れるだけで癒される。子供の泥んこ遊びがそうですが、モノと真剣に格闘することで心のモヤモヤが発散できる、これは芸術においても重要な部分を占めていて、実際、戦後関西で活躍したグループ・具体美術協会の様にそういう風になられた作品も多く、人間の体と結びついて創作するのが美術の二の基本です。ところが大人はなかなかその一線を越えることができない。そこでもつと気軽に誰でも参加できる新しいことをやってみようと考え

出したのが滋賀方式のワークショップです。今日はその伝授にやってきました」温厚な人柄が顔に出た平田さんの話は終始笑いに包まれ、大変わかりやすく興味深い内容でした。美術教育に深く関わられてきた平田さんですが、



平田さんとともにアートゲームを楽しむ

「まず先生と生徒という関係を無くしたい。伝えるべき内容だけが人歩きしてしまう知識重視の教育はやめよう」と考えてワークショップを始められたそうです。「日本ではつい本物を見ることにこだわりますが、大勢の人の肩越しにチラッと見た「モナリザ」や「パンダよりも、たとえ複製や写真でも穴の空くほどじっと観察するこ

とによつて新しい世界が開けることもある。美術それ自体を学ぶことも大切ですが、美術を媒介に和気あいあいとコミュニケーションを図り、いろんな人やいろんな角度からの見方、考え方をすることも大変大きな意義がある。そうすることで美術作品を見るテクニックが身に付けられる」ということでした。アートゲームはアメリカでは頻りに行なわれていますが、日本ではまだまだあまり普及していません。

平田さんからはいろんなゲームを教わり、私たちも実際にやってみましたが、まるで冷たく硬く固まっていたアタマがしだいにほぐされ、熱くなつていくような経験でした。
ここで、教わったゲームのなかから「マッチングゲーム」を紹介します。簡単な準備ができますので、ぜひ皆さんも試してみてください。

「マッチング(総合せゲーム)」

準備するもの：様々な美術作品の写真(絵葉書など、多いほど良い)。サイズは揃っている方が良い)やり方：1人5枚位ずつ、人に見せないようにカードを配り、残りのカードは裏向けに伏せる。上の1枚を表向けにして真中に置き、最初の人から自分の手持ちのカードの中からその絵との共通点を見つけたカードを1枚出し、共通

点について述べる。例えば、「どちらも若い女性がモデル」「どちらもうしろに木がある」「同じ国(時代)の作家の作品」...などなど。できるだけ面白い共通点を見つけ、一度出た答えは使えない。しかしどんなことにつけても他のメンバーが認めればOK。次の人は前の人が出したカードとの共通点を見つける。どうしても見つからない場合はパスし、カードが残った人が負け。



このゲームは実際やってみたのですが、まずやつていて理屈抜きにとでも楽しい。さらに、美術作品の多様な見方について学ぶことができるというオマケもついていて、とてもスグレものであるように感じました。他にもまだまだたくさん面白いゲームを教わりました。興味のある方は、資料を提供いたしますので、civiまでお問い合わせください。「池田幸子」

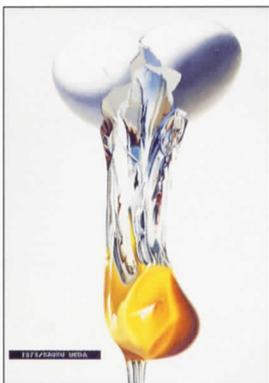
civiが 見た! — 2

高松市美術館 コレクション

《なま玉子J》

1978年/アクリル・麻布
162×130cm 高松市美術館蔵

写真? それとも絵画?? でも、近づく、筆で丁寧に描かれた絵画であることが分かり、驚かされます。あらゆる物を写真のように克明に描き出し、鏡と空気以外は何でも描く事ができる、



玉子が落ちる瞬間をとらえた奇跡の一枚!

と語るスーパー・リアリズムの第一人者、上田薫さんの作品です。

割られた玉子の殻の中から、黄身と白身がトロリと流れ落ちて行く瞬間が、何百倍にも拡大されて描かれています。作者は、一つの作品の為に、実際に200個もの玉子を割り、その瞬間の姿をカメラに納め、それを基に描いていったと言います。じゃ、「どうして写真のままではいけないの?」と、再び疑問符が頭に浮かんできた私達は、大胆にも写真撮影を試みる事にしました。モデル(?)の玉子にライトを当て、カメラを構え準備万端しかし、玉子は、想像以上のスピードで落下して行きま。技術の未熟な私達は困難を極め、結局きちんと写っていたのはここに掲載した一枚のみでした。

両者を見比べてみると、作者の手によって描かれたものの方がより強い存在感があるのは明らかです。
目の前にありながらも見逃している、日常の中の非日常。そうした神秘の世界を写真以上のリアリティをもつて垣間見せてくれる《なま玉子J》の魅力が改めて実感されました。

「山上絶代」

※《なま玉子J》は、第1期常設展(4/4~6/10)にて展示されます。

レポート
 舞踏を観て驚く!!

高松市美術館主催ミュージアム・ライブ舞踏舎天鷲スペシャル「女中たち」—抑制の効いた照明と音楽、そして鍛えられた肉体が紡ぐ物語

2000年9月26日、フランスの異オジャン・ジュネの戯曲から構想された作品「女中たち」が、美術館で上演された。普段は人々が行き交う一階のエントランスホールが、舞台上に早変わりし、御影石の床と壁は思いも寄らない異空間を作り出した。



photo:今井由佳

三人の女たちの白塗りの顔がライトに浮かび上がる。1960年代、日本で生まれた「舞踏」は肉体を表現媒体とする前衛芸術。ポカンと開かれたままの彼女たちの「口」から言葉は発せられない。似ていると思った三人の女たちは、どこか歌舞伎を連想する舞姫、ふわふわと惚けた舞姫、全身白塗りで「ケイレンダンス」を一心に踊る舞姫へとそれぞれ変貌する。自分なのか他人なのか、心の外なのか内なのかといった混沌とした表現の世界に引きずり込まれる。反発したり融合したかに見えた女たちは、やがて腹の底から高らかに笑い合い、幕は閉じられた。聞こえるはずのない笑い声が、私の心の中でしばらく響いていた。 [能瀬京子]

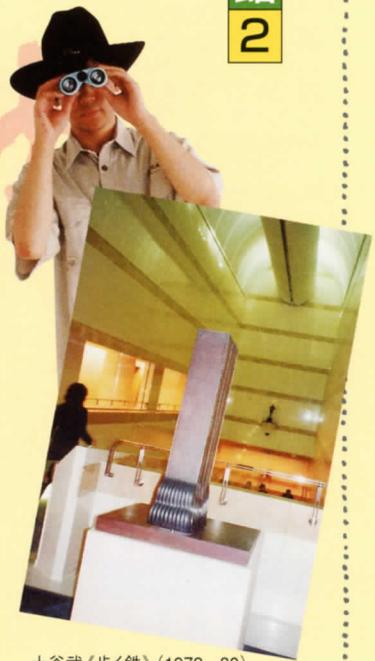
civiといつしよに美術館を探検しませんか。今回はスロープです。スロープは美術館の1階と中2階および2階とを結ぶ全長約50メートルの細長い通路で、ゆるやかな斜面になっています。特別展が行なわれる2階展示室に行く際の通り道なので、毎日多くの人がここを往来しています。足を踏み入れると、幅のそれほど広くない通路が上に伸びていて、はじめは少し圧迫感を覚えます。でもしばらく上つていくと、ある種神秘的ともいえる垂直的な空間が頭上に広がっていることに気づかされます。賑やかな街かどから美術館に入り、かすかな光を放つのはか頭上の天井を仰ぎ見ながらこのス



佐藤忠良《バレエの女》(1972)

ロープを登っていると、これから素晴らしい美術作品との出会いがある、という期待感がしだいに沸き起こってきます。スロープを歩いていると、素敵な作品との出会いもあります。来館者を出迎えるように踊り場の上に設置されているのは、佐藤忠良のブロンズ彫刻《バレエの女》です。美術館の開館時に高松市美術館友の会から寄贈されたもので、少女が見せるなげないポーズの中に、ごく普通の人間が持つ美しさや、暖か

な人間性が見事に表現されています。またスロープを上り詰めたところに置かれているのは、土谷武の彫刻《歩く鉄》です。無数の足の生えていて、それが傾斜のついた台座の上をシヤカシヤカと駆け上がっていくその姿は、スロープを上る来館者の姿にも見えてきて、笑いを誘います。スロープはただの通り道ではありません。そこで私たちは綿密に計算された空間の演出や、空間に溶け込むように設置された作品との出会いを体験し、私たちの心は日常から非日常の美的空間へとスム



土谷武《歩く鉄》(1972~80)

ースに移行させられるのです。スロープはまさに、「別世界誘導装置」とでもいうべき存在なのです。さて、美術館のこんなところをもっと知りたいという方、ぜひciviまでご連絡ください。総力をあげて探検します。

連絡先:760010027
 高松市紺屋町100-4
 高松市美術館内
 civi note
 知った?美術館係

「鈴木典子・牧野裕二

私達と鑑賞をご一緒にませんか?

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」によるギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時~午後2時~1日2回、2階展示室にて行います。

作品や作家などの知られざるエピソードが聞けるかも?

編・集・後・記

よき読者はよき編集者ならず?レールを引くのは大変、先陣(創刊号スタッフ)の苦勞に感謝。各美術館・植物園の皆様ありがとうございました。(池田)
 誌上ギャラリートークいかがでしたか?今年もどんな作品と出会い、どんなGTができるのか楽しみです。(石床)
 新しい世紀へ歩みだし、これから美術館や美術との関わりが、もっと面白く楽しいものになっていけたらと思う。(鈴木)
 《なま玉子》の記事を担当して、上田氏には及びませんが、数十個の玉子を割っての撮影、オムレツと共に、多くの発見と長年の疑問が解決。(山上)
 じん世紀、びじゅつを楽しむお伝えするため、のーみそと体力フルに使って、とり組んでいく所存です。(牧野)

美術館の今後の予定(4~10月)

【特別展】

ニューヨーク・ブルックリン美術館所蔵 印象派展 フランス〜アメリカ 2001.4.20(金)~5.20(日)
 モネ、ドガ、ルノワール、サージェント、カサットの名作88点により、フランスとアメリカにおける印象派の展開を紹介。

ポラロイドコレクション・アメリカ写真の世紀展 6.1(金)~7.1(日)

ポラロイド社コレクションから厳選された約120点の作品を通し、インスタント写真の果たした役割を検証すると同時に、20世紀のアメリカの姿を浮き彫りにする。

日本アニメの飛翔期を探る〜アニメ・カルチャー展 7.27(金)~9.2(日)

「白蛇伝」、「長靴をはいた猫」から「セーラームーン」、「エヴァンゲリオン」まで、日本のアニメ40年の歴史を多数の原画・セル画・フィギュアなどで振り返る。

池田満寿夫展 9.21(金)~10.21(日)

版画をはじめ油彩・彫刻・陶芸・文学など幅広いジャンルで才能を開花させた池田満寿夫の才気あふれる活動の軌跡を紹介。

【ミュージアムライブ】

マイケル・パーロフ&安楽真理子 フルートとハーブによる二重奏 6.16(土)午後6時30分開演予定

卓越した技術を持つ二人のアーティストによる華麗なアンサンブル。

コンドルズ 高松市美術館スペシャル公演 夏頃予定

ダンサー・近藤良平が、学ラン姿の男たちを引き連れ、ハイスピード、ハイテンションの抱腹絶倒・爆笑ステージを繰り広げる、今話題のダンスカンパニー。